

【特集趣旨】

WIDF の朝鮮戦争真相調査団に参加した女性たち

—鉄のカーテンを越えて—

藤目ゆき

WIDF の朝鮮戦争真相調査団

朝鮮戦争最中の 1951 年 5 月、国際民主女性連盟 (Women's International Democratic Federation、以下、WIDF と略称) がその加入団体である朝鮮女性同盟からの呼びかけに応えて組織した国際調査団が北朝鮮を訪問している。

WIDF は、1945 年 11 月 26 日より 12 月 1 日までの 6 日間にパリで開かれた国際女性大会 (40 カ国、850 人の女性が参加) によって創立された、女性の権利と子どもの幸福・平和と民主主義・民族独立を追求する国際 NGO である<sup>(1)</sup>。

調査団にはヨーロッパ、アジア、太平洋、アフリカ、南北アメリカの、「国連軍」参加国をふくむ東西両陣営の 17 カ国から、女性たちが参加した。調査団報告書の日本語版・英語版のそれぞれの表記によれば、名簿は次のとおりである。

ノラ・K・ロッド Nora K. Rodd (カナダ)	団長
リウ・チンヤン Chair; Liu Chin-yang (中国)	副団長
イダ・バッハマン Ida Bachmann (デンマーク)	副団長

<sup>(1)</sup> WIDF は 1945 年創立大会 (パリ) 以後、70 年代前半までに 48 年 (ブダペスト)、53 年 (コペンハーゲン)、58 年 (ウィーン)、63 年 (モスクワ)、69 年 (ヘルシンキ)、75 年 (東ベルリン) と、国際女性大会を開催した。また、他の国際 NGO と共同して多くの重要な国際集会を組織した。55 年の世界母親大会 (ローザンヌ)、60 年の国際女性デー 50 周年記念集会 (コペンハーゲン)、欧州諸国女性の平和・軍備撤廃集会 (サルツブルク)、1962 年の軍備撤廃集会 (ウィーン)、66 年の児童保護国際会議 (ウィーン)、70 年の欧州の安全と協力に関する会議 (イースタード) 及びアジア・アフリカ・ラテンアメリカの女性問題に関する国際会議などである。WIDF は、1972 年に国連総会が 1975 年を国際女性年と指定するにあたっては、経済社会理事会を通じて推進力となった。平等・発展・平和を柱とする国際女性年の民間ベースの世界大会は WIDF のイニシアティブのもとに 75 年 10 月東ベルリンで行われた (140 カ国 1600 人の代表参加)。日本の女性団体は WIDF から 1949 年 6 月にアジア女性会議 (北京) への参加を呼びかけられたが、占領下であり参加できなかった。占領期の日本では日本民主婦人協議会や婦人民主クラブが国内で WIDF と結びつきをもった。独立後の 53 年、WIDF の大会に日本最初の代表団が参加し、同年結成の日本人団体連合会が 1957 年 10 月に WIDF に正式に加盟した。柴山恵美子「国際民主婦人連盟 [英] Women's International Democratic Federation (WIDF)」岡崎次郎編集代表『現代マルクス＝レーニン主義事典』上、社会思想社、1980 年、618 頁

【特集趣旨】 WIDF の朝鮮戦争真相調査団に参加した女性たち  
—鉄のカーテンを越えて

ミルセ・スヴァトソヴァ Misuse Svatosova (チェコ・スロバキア) 書記  
トレース・ソエニト・ヘイオリゲルス Trees Soenito-Heyligers (オランダ) 副書記  
モニカ・フェルトン Monica Felton (英国)  
マリア・アヴシヤンニコワ Maria Ovsyannikova (ソ連)  
バイ・ラン Bai Lang (中国)  
リ・ケン Li Keng (中国)  
ジレット・ジーグレル Gilette Ziegler (仏)  
エリザベタ・ガロ Elizabeth Gallo (伊)  
エヴァ・プリースター Eva Priester (豪)  
ヒルデ・カーン Hilde Cahn (東独)  
リリー・ヴェヒター Lilly Waechter (西独)  
ジェルメ・アンネヴァツ Dr. Germaine Hannevard (ベルギー)  
リ・チケ Li Thi Que (ヴェトナム)  
カンデラリア・ロドリゲス Candelaria Rodriguez (キューバ)  
レオノル・アギアル・ヴァスケス Leonor Aguiar Vazquez (アルゼンチン)  
ファトマ・ベン・スリマン Fatma Ben Sliman (チュニジア)  
アバシア・フオイデル Abassia Fodil (アルジェリア)  
カーテ・フロレン・ヤコブゼン Kate Fleron Jacobsen (デンマーク) オブザーバー

彼女たちは 1951 年 5 月 16 日から 27 日にかけて調査を行い、その結果を報告書『朝鮮：私たちは弾劾する—1951 年 5 月 16 日～27 日の朝鮮における WIDF 委員会報告』(Korea: We Accuse : report of the Commission of the Women's International Democratic Federation in Korea, May 16 to 27, 1951) にまとめた。その報告書は英、仏、露、中国、朝鮮の 5 カ国語で作られ、24 カ国語に翻訳されて数千万部が発行された。すべての国連機関と全代表、世界中の政府、膨大な数の個人と団体に送付され、朝鮮戦争停戦のための国際世論の形成に深甚な役割を果たした。この国際女性調査団の取り組みは、女性の国境を越える連帯によって冷戦の壁を両側から破り、戦争の災禍を地上から取り除こうとした重大な試みであった。

この国際女性調査団に参加した女性たちは、どのような人たちだったのか。どういう経緯でなぜ朝鮮戦争戦場まで出かけたのか。朝鮮で何を感じ、どう考えたのか。自分の見聞や思いを自国に帰ってからどのように人々に伝えたのか。その反響はどのようなだったのか。本特集は、その手がかりを得るために企画した。17 カ国 20 名 (オブザーバーをふくめると 21 名) にのぼる女性のうちわずか 2 人しか取り上げることができなかつたし、その 2 人についても書くべきことを書き尽くせたわけではないが、これを第一歩としてさらに研究を続け、他の女性たちにも光をあてたいと念じている。

これは、ささやかではあっても、すこぶる重要な一歩になるだろう。なぜなら、この女性国際調査団は、その果たした役割の大きさに比して、世界の女性史叙述のなかでほとんど扱われたことがないからである。以下、このようなテーマに取り組むにいたった背景や経過、関心の所在を明らかにしておきたい。

韓国で進展した朝鮮戦争前後の民間人虐殺に関する調査・研究

私が WIDF の国際女性調査団に関心を抱くようになったのは、朝鮮戦争開戦から 50 周年にあたる 2000 年が近づいた頃のことであった。当時、韓国では 1980 年代から 90 年代にかけての民主化運動を背景として朝鮮戦争前後の米・韓軍による民間人虐殺問題に関する調査・研究がめざましく進展し、90 年代末には東アジアの冷戦と国家テロリズムを問う国際シンポジウムが台北(1997)、韓国の済州島(1998)、沖縄(1999)、韓国の光州(2000)で連続して開催されるなど、長く歴史の闇に封じ込められていた冷戦体制形成期の反共国家テロリズムが明るみに出されはじめていた。私が韓国のカン・ジョング教授による報告から「小さな戦争」という概念を知ったのもそのときのことである<sup>(2)</sup>。

朝鮮戦争は一般に、1950 年 6 月 25 日に勃発し、1953 年 7 月 27 日の休戦協定まで続いた戦争を指すものと理解されている。だが、その「大きな戦争」が始まる以前に、1948 年に米軍政下の南朝鮮における単独政府樹立に反対する民衆の二月ゼネスト・済州島四・三蜂起があり、米韓軍・右翼暴力組織と南朝鮮民衆勢力との間の暴力的な衝突によって実質的に「小さな戦争」が始まっていた。済州島では大韓民国成立後の 1948 年秋から 49 年にかけて数万名の島民が「焦土化作戦」によって殺され、また済州島以外でも 48 年 10 月の麗水・順天事件、1949 年 12 月の聞慶虐殺事件のように、民間人が国家テロで殺害される多数の事件が起きた。「大きな戦争」、つまり全面戦争としての朝鮮戦争が始まると、韓国軍や韓国警察が「国民保導連盟」の加盟者や収監中の政治犯や民間人など少なくとも 20 万人あまりを殺害した。さらに、米軍が避難民を射殺した老斤里事件や韓国軍が部落住民を殺害した居昌事件をはじめ数々の民間人虐殺事件が発生し、朝鮮戦争停戦までに南朝鮮の民間人死傷者数は 99 万名を超えたという<sup>(3)</sup>。

米韓軍が民衆に虐殺・蛮行を働いたというこれらの事実は韓国で長らくタブーであった。が、民主化と過去清算を求める韓国の人々の努力がこのタブーを打破し、盧武鉉大統領時代(2003 年 2 月 - 08 年 2 月)には「真実・和解のための過去事整理基本法」も制定され、朝鮮戦争期の民間人虐殺の真相究明が本格的な国家事業の一部になった。李明博政権が 08 年に発足してからは過去清算事業の後退が指摘されているが、朝鮮戦争前後の米・韓軍およびそれらに後援された右翼テロリスト組織による民間人虐殺・蛮行をなかつたもののように再び覆い隠すことはとうてい不可能なことである。

このような韓国社会の動向にふれ、日本現代史の研究者として無関心でいられなくなった私は、国際民主法律家協会、国際科学者委員会、そして WIDF がそれぞれ朝鮮戦争下の北朝鮮に送った調査団による報告書の日本語版を復刻・編集し、『国連軍の犯罪—女性・民衆からみた朝鮮戦争』（不二出版、2000 年）と題して出版した。同年発行の『女性・戦争・人権』第 3 号に私が寄稿した「国際女性調査団がみた朝鮮戦争」（126～148 頁）は、WIDF が調査団を派遣した背景、報告書の内容、同時期の南朝鮮の状況についてまとめたもの

<sup>(2)</sup> 国際シンポジウム「東アジアの冷戦と国家テロリズム」日本事務局編集発行『済州島シンポジウム報告集』1998 年、姜禎求「朝鮮戦争と良民虐殺」アジア共同行動日本連絡会議編集発行『資料集 朝鮮戦争と良民虐殺』2000 年

<sup>(3)</sup> 朴元淳「冷戦時期のアジアにおける人権侵害とその賠償問題—韓国での虐殺事件と賠償の経験」、東アジアの冷戦と国家テロリズム」日本事務局編集発行『台湾シンポジウム報告集』、1997 年、221～226 頁

である。また、拙稿「冷戦体制形成期の女性運動—占領下の日本民主婦人協議会と朝鮮戦争」（三宅義子編『日本社会とジェンダー』明石書店、2002年、159～186頁）には、WIDFの調査団報告書を日本で最初に邦訳・出版した日本民主婦人協議会について書いた。当時連合国占領下であった日本では、朝鮮戦争勃発とともに日本全土が国連軍基地として利用されるようになり、反戦運動への弾圧は激化した。『血のさけび』を頒布した活動家たちはたちまち摘発され、逮捕・投獄された女性もいた。

2004年に発足したアジア現代女性史研究会にとって、「朝鮮戦争と女性」は常に大きな関心事であった。2008年1月には、明石書店のアジア現代女性史シリーズ第6巻として金貴玉著／永谷ゆき子訳『朝鮮半島の分断と離散家族』を出版した。同年発行の『アジア現代女性史』第4号は金貴玉の協力を得て「朝鮮戦争と女性」を特集している。また2010年発行の第6号は朝鮮戦争を背景に駐韓米軍基地周辺に形成された「基地村」の問題を特集し、「基地村」の女性たちを支援する韓国の市民団体による報告書を翻訳・掲載した。

### 女性史の空白

このような経過が示しているように、私たちの「朝鮮戦争と女性」に関する研究や出版はもっぱら朝鮮戦争に関する韓国における研究成果によって励まされてきた。換言すれば、日本や欧米で書かれた女性史を読んでも、「朝鮮戦争と女性」といった関心が喚起されるような先行研究に出会うことはできなかったということである。

朝鮮戦争は第二次世界大戦後の世界のありようを規定した大規模な国際戦争であり、「国連軍」として参戦した国家は16カ国を数える。それは、西側だけで戦争当事国が16カ国にのぼるということである。また、朝鮮戦争最中にトルーマンが原爆の使用もありうると宣言したために核戦争の危機感が広がり、核兵器に反対するストックホルムアピールには世界中で5億人が署名を寄せたといわれる。

だが、そのように世界的に重大な意味を持つこの戦争は、欧米の女性史叙述において興味の対象からは外れてきた。朝鮮戦争に派遣された女性国際調査団の活動は、これまで女性史上で意義あるものとして扱われていない。冷戦が朝鮮戦争というピークを迎え、西側諸国で赤狩り旋風が巻き起こされた1950年代は、西欧・米国、そして日本といった西側諸国の女性史叙述において長らく空白にされた時代であった。あたかも1950年代は見るべき女性運動が存在しなかった、書く価値のない時代のように見失われてきたのである。

1950年代の女性史の空白は、それ自体がまことに大きなテーマだと言える。リサ・タトルが1986年に刊行した『フェミニスト事典』は渡辺和子の監訳によって1991年に邦訳書が明石書店から刊行され、女性問題や女性史を学ぶために非常に有用な図書として人気を博し、今日まで版を重ねている。しかし、そこには前述の女性国際調査団に参加した各国の女性たちの誰一人としてとりあげられていないし、そもそもWIDFという巨大な国際女性組織自体が、項目に入っすらいない。

### ジル・リディントンのイギリス女性平和運動史

このような女性史の空白を考えるために、ジル・リディントン『魔女とミサイル—イギリ

ス女性平和運動史』(白石瑞子・清水洋子訳、新評論、1996年、原著は"The Road to Greenham Common-Feminism in Britain since 1892", 1989年)は興味深い。リディントンが女性史の空白に関連して、「50年代はフェミニストの政治活動が中断された時期だった。だから、この時代に成長した女性はフェミニズムの活動を受け継いでいなかった(中略)。私には女性全体があまりにも死んでいるように見え、そんな状況から逃げ出したいと思った。年上の女性の大半は私にそう思わせた」というシーラ・ローバトム『女の意識、男の世界』("Women's Consciousness, Man's World, Pelican, London", 1973年)の一節やデール・スペンダー『いつも女の運動があった20世紀』("There's Always Been a Women's Movement This Century", London, Pandora Press, 1983年)の「1960年代以降の女性運動の担い手である私たちは、前の世代の女性たちの運動を無視してきた。これは全く愚かなことである」「彼女たちの活動が知られていないのは、60年代の私たちのせいである」というくだりを紹介している。スペンダーは同書でドーラ・ラッセルを取り上げ、冷戦期に関する叙述はわずかだが、鉄のカーテンを越えて団結しようとした女性たちの存在を肯定的に指摘し、今日ではほとんどそれを知る人がいないと述べている(189頁。Spenderの原著ではp.123)。

『魔女とミサイル』は、このような英国女性史叙述の展開をふまえて女性平和運動史を跡づけようとした著作である。にもかかわらず、1950年代初期にドーラ・ラッセルが英国政府による世界平和評議会に対する妨害を非難したことやWIDFに関与した事実に対し少し言及があるものの、WIDFの活動それ自体は無視されている。50年代の女性平和運動は三段階に区分され、第一は、原爆実験の脅威に女性協同組合ギルドが警告を発した1954~57年、第二は58年に始まった「核兵器廃絶キャンペーン」(CND)とCND女性団体の活躍期、第三は核兵器実験という現実的恐怖によって新しい女性団体が次々と生まれた61年前後である、という(188~192頁)。すなわち、リディントンの認識においてイギリス女性の平和運動は朝鮮戦争停戦翌年の1954年に始まるのであり、朝鮮戦争時代のWIDFの活動は平和運動や女性運動として意味あるものとは考えられていなかったのである。

旧西側諸国においてWIDF研究が乏しい理由としては、1950年代のWIDFが社会主義諸国の女性団体と強く結びついていたために欧米のリベラル・フェミニズムによって無視されがちであったこと、そこから「1950年代は女性運動の空白時代」という誤認が生じたこと、また1960年代以後の中ソ対立や1980年代末のソ連・社会主義の崩壊などを背景にWIDFが次第に弱体化していったことなどが挙げられるであろう。

だが、たとえばモニカ・フェルトンのように国際的に有名であった女性については、女性史の観点から本国での研究がいくらかあるのではないか。そのような期待をもって、私は2009年にはイギリス、また2010年にはフランス、ベルギー、オランダ、ベルリンを訪問した。しかし、そこで調査団に加わった女性たちに関する一次資料やWIDFに関する資料を集めることはできたものの、WIDFやWIDFが朝鮮に派遣した調査団について関心のある女性史研究者に会えずじまいであったのは残念なことであった。

#### ウエンディ・ボジュマンとフランシスカ・デ・ハーン

が、思いがけないところから新しい研究が生まれていることを知ることになった。2009年9月、フランシスカ・デ・ハーンが「トランスナショナルな女性組織に関する西欧歴史叙

述における冷戦パラダイムの継続：国際民主女性連盟の事例」 ‘Continuing Cold War Paradigms in Western Historiography of Transnational Women's Organisations: the case of the Women's International Democratic Federation (WIDF)’ と題する論文を『女性史評論』 (Women's history review. 19(4), Sep 2010, pp 547-573) に発表し、これまでの西欧歴史叙述において世界女性史にすこぶる大きな役割を果たした WIDF とそれに関与した女性たちの姿がほとんど叙述されずにきたことを主題とし、その理由を西欧と米国の女性史叙述における「冷戦的思考枠組みの継続」であるとして批判したのである。

ハーンはブダペストのセントラル・ヨーロッパ大学教授で、『オフィスワークのジェンダーと政治学：オランダ 1860-1940』 (アムステルダム大学出版局、1998 年)、『ケアリング・パワーの勃興：英国とオランダにおけるエリザベス・フライとジョセフィン・バトラ』 (共著、アムステルダム大学出版局、1999 年) などの著書があるジェンダー研究者である。彼女は、19 世紀から 20 世紀にかけての中欧、東欧、南東欧の女性運動・フェミニズム伝記辞典の共同編集者であり、『アスパシア—中欧、東欧、南東欧女性・ジェンダー史の国際年報』 (2007 年創刊年) の創立編集者でもある。

ハーンが「継続する冷戦的思考の枠組み」として指摘したことは、第一に西欧・米国中心のフェミニストと自認する女性たちが自らを「政治的に中立」だと思いこんでいること、第二に WIDF は鉄のカーテンの向こう側の存在で、西欧の女性運動とは何の交流もなかったと思いこんでいること、第三に WIDF やその加入組織は「共産主義者」であり「フェミニスト」ではないと思いこんでいることである。これらの思いこみの結果、西欧系の国際女性組織ばかりがとりあげられ、WIDF が知られないままになってきたとするハーンの批判は、私がぼんやりと抱いていた印象や疑念の本質を解き明かすものであった。

ハーンは WIDF にかかわった様々な女性たちを具体的にとりあげて、米国下院の非米活動委員会の活動、すなわちマッカーシズムのなかで WIDF がどのように政治的に排除され、それがいかに「政治的に中立」を自認する欧米フェミニストたちの思考の枠組みに寄与したかを解明した。また、WIDF をソ連と共産党の命令に従っただけの女性の集まりに過ぎないかのように描く手法に対して、女性史の具体像をもって反駁した。このようなハーンの視点と議論は、朝鮮戦争時代の WIDF の平和運動に関する直接的な言及こそないものの、WIDF が朝鮮に派遣した調査団を考察するために多大に参考になり、励ましとなる。

ハーンが WIDF を研究していると知らせてくれたのは、ウエンディ・ポジュマンである。彼女が日本婦人団体連合会会長であった櫛田ふきの名前の発音を問い合わせたとき、私は「WIDF について研究している人と知り合ったのは初めてです」と嬉しい驚きを感じながら返事を書いた。その返信にポジュマンがハーンの名を知らせてくれなければ、私がハーンの論文に気づくのはもっと遅くなっていたことだろう。そのポジュマンもまた、WIDF の有力団体であったイタリア婦人同盟に関する研究を最近まとめて、朝鮮戦争当時イタリア婦人同盟が展開した反戦運動にも言及している (‘For Mothers, Peace and Family: International (Non)-Cooperation among Italian Catholic and Communist Women’s Organisations during the Early Cold War,’ Gender & History 23, no. 2 (August 2011): 415-429.)

これまで私は南東欧女性史についてほとんど知らず、米ソ冷戦の終焉後もなお朝鮮半島の南北分断が続き、米軍の駐留が続いているアジアの状況から、「冷戦構造の継続」を考えようとしてきた。が、ベルリンの壁が崩壊してもなお「冷戦的思考枠組み」が継続していると

いうハーンの指摘を知り、南東欧の女性史の一端にふれてみて、自分がこれまで「ヨーロッパ」あるいは「欧米」と総称される世界について、その内部のヒエラルキーや異なる歴史経験について無知だったことを遅まきながら自覚し、冷戦的な秩序・思考からの解放を志向する女性史研究者がそこにもいることを発見して嬉しい驚きと新しい希望を感じている。冷戦の壁を破ろうとした（している）女性たちの努力はしばしば権力からの迫害を受けた（る）し、また時に愚行と嘲笑されてきた（いる）が、1951年に鉄のカーテンを越えて戦火の中の朝鮮に身体的政治的社会的な危険を冒して行った女性たちが世界各地にいたように、彼女たちの努力とそれを可能にした WIDF のような国際女性運動の真価を再評価しようとする女性史研究が新たに登場している。

### 今後の調査・研究

本号では調査団に参加した 21 人の内 2 人だけをとりあげたが、他の 19 人に関しては、ある程度人物像が分かる人もいれば、今日までほとんど何も分からないままの人もある。

調査団にオブザーバーとして参加したカーテ・フレロン・ヤコブゼンは、著名なジャーナリストで、反ファシズムの活動やベトナム反戦運動にも活躍した人であり、帰国した年に Nord-Korea. Rapport fra et hærgt land（北朝鮮：破壊された国からの報告）を出した。エヴァ・プリースターもジャーナリストで、同年にウィーンで Ein Augenzeugenbericht vom großen Vernichtungskrieg（とてつもない絶滅戦争に関する目撃者の記録）を出版した。彼女たちの著作を読み解くことで調査団の活動がいつそう立体的に理解できるようになるだろう。

また、自国に戻って解職や起訴、投獄といった迫害を受けたという意味で、本号でとりあげたフェルトンの他に、西ドイツのリリー・ヴェヒターとキューバのカンデリア・ロドリゲスについての調査も進めたい。

他にもさまざまな角度から、WIDF の調査団への興味はつきない。例えば、調査団にはフランス人のジグレルと共にフランス植民地主義からの解放を求めて闘うアルジェリア・チュニジア・ベトナムの女性たちも参加していた。国際女性運動における新旧宗主国・新旧植民地の女性どうしのつながりはどのようなものだったのだろうか。あるいはまた、中国の女性団体は WIDF の有力団体で、調査団の訪朝に特別の役割を果たしたが、それは中国で公的に、また私的に、どのように記録されてきたのだろうか。調査団に直接・間接に関与した女性は多数いたので、中には健在な人もいるのではないか。調査を急ぎたいものである。

WIDF の真相調査団の取り組みは、17 カ国からの参加、24 言語への報告書の翻訳という世界的取り組みであっただけに、調査団の全体像をとらえるには言語力が必要不可欠である。今後、いつそう広く言語・地域の専門家に協力をお願いし、調査を進捗させたい。

## 【地図】 WIDF 調査団が訪問した朝鮮北部

調査団全員が訪問した場所：新義州・南市・定州・安州・順川・順安・平壤

調査団がグループに分かれて訪問した4地方

江原道：元山・文川など

中国（リウ・チンヤン）・ベルギー・イタリア・チェコの代表

慈江道：介川・熙川・江界・満浦など

東独・西独・中国（バイ・ラン）・オランダの代表

黄海南道：安岳・信川など

オーストリア・中国（リ・ケン）・キューバ・カナダ・ソ連・英国の代表

平安南道：南浦・江西など

フランス・チュニジア・アルジェリア・ベトナム・デンマークの代表

